

住む、暮らす。
特集

震災後の 家づくりを考える。

地震国・日本は、さまざまな悲しい震災の体験をしてきました。そしてその数々の体験の中から、震災を乗り越えていこうという新しい家づくりの考え方や価値観が生まれてきています。阪神淡路大震災・新潟県中越地震を経験した2人の建築家に震災後の家づくりがどのように行われ、どのように受け入れられたかをお聞きしました。これからのみやぎの家づくりにとって、価値あるヒントが隠されているはずです。



大震災を経験した 建築家に学ぶ家づくり



人間的な家づくりを
考えさせられた

阪神淡路大震災を経験した
建築家 瀬戸本 淳氏



生命を守る「居場所」の
大切さを実感した

新潟県中越地震を経験した
建築家 高田清太郎氏

住まいは家族一人一人の居場所を大切に包み込むところ

人命を守る異舞づくりへ 地盤改良も含め定期的管理をする必要

「常在戦場」は「常に戦場にあるの心を持って生き、ことに処す」という思想。この長岡藩に思づく思想が住まい作りにも活かされたと言います。

地震がやってくる前に準備意識が届く範囲、行動が伴う範囲で準備してきました。「準備を怠り無く行うこと」は地震国日本の使命だと言います。

「住まいは家族一人ひとりの居場所を大切に包み込むところ。す。倒壊しない建築や、人命を守る異舞、シエルト感覚の住まいづくりを心がけています。」

雪国だからこそある 自然に負けない 住まいづくりの観智

■高床式住宅
中越地方には、ちよつと変わった建て方の家があります。



高床式住宅



多塔屋根



高田清太郎さんの家づくりの哲学

住まいづくりは異舞づくり。集は「形」舞は「想い」。

あたり前の形、見なれた形、不思議な形。この世の中にはさまざまな形が存在します。住まいの形も大切な生命を育む家族一人一人の想いが現れる場所。高田の住まいづくりは規格住宅ではなく、他からの借り物でもありません。オーダーメイドされた衣服にその人の想いが現れるのと同じように「異舞」にも、その人の想いやスタイル、サイズが時に個性的な形になって現れても何ら不思議な事ではないのです。形のむこうにみえるもの。まず無形の想い(舞)こそ大切にすることです。

雪の多い地方によく見られる建て方で、高床式と言います。大雪で1階のリビングに採光が届かなくなり、穴蔵生活が余儀なくされます。そこで基礎を高く底上げするのです。

震災において高床式住宅は危険と言われていましたが頑丈だという検証ができました。東日本大震災では、津波により1階に被害を受けるケースがたくさんありましたが、「2m×3mの津波ではこの高床式住宅が有効ではないだろうか」と高田清太郎さんは考えます。



自然落雪・やじろべえ住宅

■自然落雪・やじろべえ住宅

「屋根の雪は地震の時も、大きな問題になります。雪の重さで揺れが大きくなり、建物にインパクトを与えます。」

そこで注目したのが、雪降ろしの心配のない「耐雪住宅」。やじろべえの持つバランス性を建築構造に活かせることにより、2.0〜2.5メートルの雪に耐える安定性を確保しました。

■多塔屋根
屋根を四ブロックに分け、小さな屋根を造る多塔屋根という家づくり。この考え方は「住まいは家族一人ひとりの居場所を大切に包み込むところ」というコンセプトを形にしたもの。四つの各塔は、独立性を持たせた屋根構造を表し、採光部を設け明るくしました。さらに見晴らしのよい越し屋根を西側にうらにもいたしました。

人生は自分の生命を維持するための「居場所」探しの旅

長岡藩の「常在戦場」。常に危機を考え住まいづくり

建築家 高田清太郎氏



(株)高田建築事務所。
1949年新潟県長岡市生まれ。日本大学理工学部建築学科卒。1976年現事務所を設立。新潟大学工学部建築学科、県立新潟女子短期大学(新潟県立大学)生活学科、新潟大学大学院自然科学研究科などの非常勤講師を勤める。日本建築学会作品選集支部選考部会委員を勤める。

長岡に活躍される建築家・高田清太郎さんに新潟中越地震によって建築に対する考え方が変わったかをお聞きしました。

「建築に対しての元々の基準はあまり変わりませんが、身体に受けた打撃の大きさに心情的にとてもショックでした。」

マグニチュード6.8、震度7。余震が本震と同等のクラスが3つ続きました。高田清太郎さんのたずさわった異舞の数々は震度5強〜7の地域だったと言います。

「地震に関しては震災以前から住まいづくりにおいて対応してきました。まさに「常在戦場」という長岡藩の藩風です。」

エネルギー・耐震性・ハイブリッド… 持続可能性という観点で見直す



「建築は、強・用・美+コストの上に成り立っています。震災以降、建築を頑丈にすることが求められています。地震で倒壊家屋が発生すると、その下敷きになり圧死者が出てくる。人を包み込む果敢の構造は堅固でなければなりません。人命第一の建築が求められるゆえんである。しかし、強さだけではガチガチで時に閉鎖的な空間を造ってしまいがちです。」

生活する上では、いかに開放を求めるかも重大だと高田清太郎さんが考えます。特に太陽

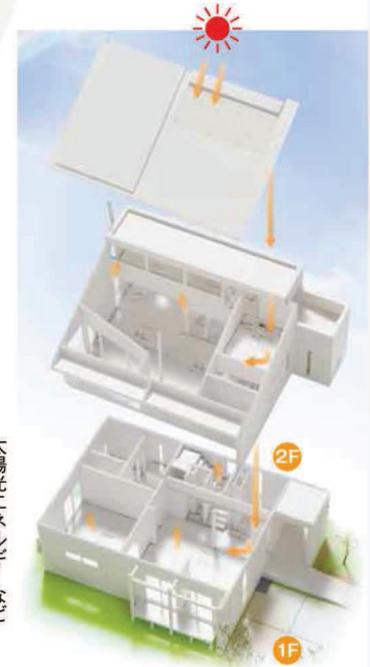
光や自然景観を取り入れようとする時は、開VS閉のバランスが大切です。

「提唱しているセンターコアは、閉を受け持ち、開放の援助をしてくれれます。OPEN&CLOSEDのハイブリッド工法です。閉じる空間はしっかり閉じて開放する空間はしっかり開けようという発想です。」



W&W工法プロジェクト

OPEN&CLOSEDのハイブリッド工法。閉じる空間はしっかり閉じて開放する空間はしっかり開けようという発想です。



太陽熱が循環する200年住宅

リブチの森のたまご展示場

太陽光発電システムによる電力供給。高耐震性、高耐久性、高メンテナンス性など長く住み続けるために家族が安心して暮らせる住まいを提案しています。



太陽光エネルギーなどライフラインからライフスロットへ変換する

「震災によって浮かび上がった問題は、電力・水道・通信などのライフ・ラインは、ラインであるために大規模災害に対して非常に弱く分断されてしまうということです。災害に強い地域づくりを進めるためにはライフ・ラインから自立したライフ・スポットを整備することが必要です。このような自立システムは循環型社会を支える「自給システム」の基盤にもなります。」

「ライフラインからライフスロットへ。これは、一戸の戸建てを考える上でも必要になります。高田事務所が設計した「リブチの森のたまご展示場」はエネルギーの自給自足を目指した地球にやさしい住まいづくりです。」

二世帯が快適に過ごすために 間(距離)と居方(方向)を考える

二世帯住宅をストレス無く住まうために、距離感・居方などのベクトルに気をつける

「震災以後、家族の絆を意識し、二世帯住宅を検討している方が増えたと言われています。当社でも、近年二世帯住宅の計画のお話をいただく機会が増えたように感じます。絆・共助精神がこれからの住まいづくりに基盤にあるような気がします。」

二世帯住宅のメリットは、大家族ならではの団欒を楽しむことができる、家事などを分担しあえる、子育ての協力を仰ぎや



- 斜めの奥行き
一方の世帯を段床状にずらすことで斜めの奥行きが生まれ、お互いの視線の干渉を和らげます。
- 緑をはさむ
二世帯住宅の間に緩衝帯として共通の庭をはさむアイデア。距離感を生み出すことができます。
- スクリーン
自在に可変できるスクリーン(障子)を設定することで、パブリック性とプライベート性をコントロールできます。

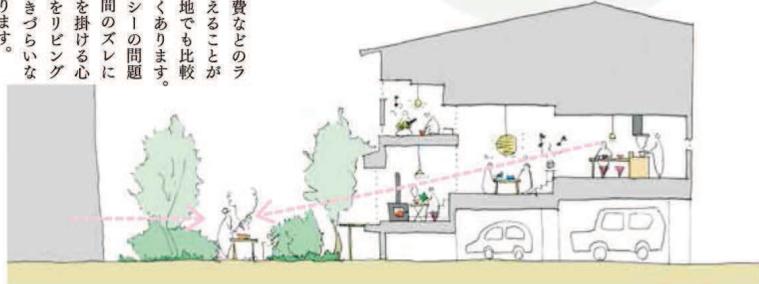
Focus Gree ~二世帯の距離感~

既存の親世帯に対面する新たな子世帯を、同一敷地内につくる二世帯住宅の提案。お互い居心地の良い距離感をいかにつくるかがテーマです。



「いい間(距離感)を保てるか?」「いい居方(方向)を創りだせるか?」これが二世帯住宅を成功させるポイントだと高田さんが話します。

「いい間(距離感)を保てるか?」「いい居方(方向)を創りだせるか?」これが二世帯住宅を成功させるポイントだと高田さんが話します。



リブチの森間知づくりプロジェクト

- 1 自然との共生：居心地の良いまちづくり1/1の揺れをつくる。住民参加型のまちを育てる活動(植樹祭・夏祭り・野点のお茶会・光と雪のイルミネーション)
- 2 歴史との共生：土地のもつ記憶をデザインサーベイし、新しまちづくりにその記憶を埋め込みデザイン化する。
- 3 人々の共生：老若男女が混在するまちづくりを目指し、住民に開放する地域交流スペースを持つ地域密着型介護施設を併設する。



ごく自然の居場所を求めて介護が快護になる間知づくり

「かつては介護が必要になった時、日常から離れた景観の良い郊外に行こうと言う風潮がありました。これは、生活空間として記憶されてきた風景が切断されることであり、コミュニケーションも途絶えがちになり認知症が進む事例も報告されています。」

介護が特殊な扱いとして隔絶された位置に置かれるのではなく、人間の生老病死のリズムの中で当たり前になり、ごく自然に取り扱われることが求められています。高田さんが目指す介護施設は生まれ育った地で、ごくごく普通の居場所を取り戻すためのプロジェクトです。

「自然との共生はもとより、地域交流スペースを併用した高齢者施設を作ることにより老若男女が共生するまちづくりを目指しました。私たちのまちづくりは「間知(まちづくり)」と呼び、人々と自然と歴史が共生する新しいまちづくりプロジェクトです。震災後大切にされるようになった共生の住空間づくりです。」